



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 最近三十年間におけるキリスト教学の新展開  |
| Author(s)        | 石沢, 澈; Ishizawa, T  |
| Citation         | 基督教学, 5, 26-29  |
| Issue Date       | 1970-10-30  |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/46259">https://hdl.handle.net/2115/46259</a> |
| Type             | journal article   |
| File Information | 5_26-29.pdf   |



## 最近三〇年間に於けるキリスト教学の新展開

旭川 石 沢 澈

序、かつて専門にキリスト教学を学んだが、その後、三〇年間ほど歴史学（主として日本史）の研究に専心していた間に、キリスト教学は、どのような変化をとげたかを再認識するのが研究の目的である。

### 一、旧約聖書の史的 연구

イ、オリエント考古学 연구による旧約聖書 연구の新展開。

The Bible and the Ancient Near East—Essays in honor of William Foxwell Albright (1961) の書は、古代東方の歴史についての、言語学的、考古学的また全分野についてのアルブライト教授の貢献をたたえて出された論文集であるが、最近において、メソポタミヤ、パレスチナ、エジプト地方近隣の発掘によって、旧約の歴史的背景が明らかとされ、メソポタミヤ文明の起源をも

とめて、ミヌメル文化（ウル王朝）の研究に及び、テル・エル・アマルナ文書の研究は、ヘブル初期の歴史を明らかにし、パレスティンの考古学 연구は、G・E・ライト教授によって、詳細な文化史年表がつくられるようになった。

ロ、イスラエル民族史、宗教史の研究の發達は、旧約解釈学に貢献す。

Leo Trepp: Eternal Faith, Eternal People (1962) の書は、ユダヤ民族の歴史と思想の歴史的研究で、ユダヤ人の教義、傾向、儀式、慣習などをのべている。

旧約神学思想の問題としては、古代ユダヤの宗教思想を、契約思想にありと説いた人では、古くはM・ウェーバーがあるが、旧約神学者としては、スイスのアイロヒロットの、「予型論的方法」がある。また、ゲルハルト・フォン・ラッドは、Typological Interpretation of the

O. T. Theology (1962) で、歴史科学的イスラエル史とイスラエル人の信仰告白としてのイスラエル史の区別のある事を提起している。

## 二、新約聖書の新しい研究の動向

イ、ブルトマンとその学派のNT研究の動向

R. H. Fuller: The New Testament in Current Study (1962) - The Main issues of debate over the Past two decades and a critical assessment of Present trends (1967).

W. Hordern: New Directions in theology Today  
R. M. Grant: A Short History of the Interpretation of the Bible (1963).

両大戦間に、N・T・の研究で、様式的的研究と聖書神学の復活があり、両者とも、N・T・は神が歴史の中で、ナザレのイエスによって、終末論的行為をなされたというケリグマ(宣教)が中心であるとの考に達したが、一九四一年以来、ブルトマンはこのケリグマ説をみとめ、かつ、ケリグマの表現が、人により、時代によって、如何に異ってきたかを示し、それが当時の文学や神話から出ているかを論じた。ブルトマンは、自言神学者たちと

は異り、このケリグマを、信仰により永遠の生命をうるとの実存論的解釈によって肯定し、ケリグマの非神話化をはかった。

ブルトマン神学は、三つの点で批判をうけている。

1. 非神話化によって、キリストの歴史性を失なうと、昔のドケチズムに陥りはせぬか。
2. ブルトマン神学は、初期のハイデッガーの実存哲学に依存しているが、N・T・解釈に、それは妥当であるか。
3. 非神話化は、キリスト教が救済史たることを危くしないか。

今日では、Post-Bultmanianの時代であって、ドケチズムに陥る危険をさけんとして、ブルトマンの弟子たちの間に、従来とは異った方法による、歴史的イエスの研究が再開され始めている。E・ケーゼマンらである。

ロ、A・M・ハンター、その他の新約神学

A. M. Hunter: Introducing N. T. Theology (1957)

ハンターは、ケリグマを中心にして、聖書神学を再建せんとしているが、ブルトマンの非神話化の神学を批判し、イエスの物語に、かなりの歴史性をみとめる立場をとっているが、ブルトマンのように、信仰による生命を

実存哲学的に理解している。W・パンネンベルグの「歴史としての啓示」(一九六二)やJ・モルトマンの「希望の神学」なども、啓示の歴史性をみとめている。

三、キリスト教的歴史観とキリスト教史、教会史の研究  
イ、キリスト教的歴史観

Harris Harbison: *Christianity and History* (1964)

第二次大戦後、とくに「歴史の意味」についての、キリスト教的認識が、識者の間に、深い関心をもたれるようになり、ベルジャエフ、テイリッヒ、マクマリー、R・ニーバー、E・C・ラスト、カール・レビット、H・バタール、ファイルドらの研究が発表され、歴史の意味を考えたり、歴史の発展思想は、歴史をサイクル運動とみるギリシャ思想からはきたらず、ヘブルと原始キリスト教から出ていることが明らかとなり、歴史についての、キリスト教的認識が、関心をひくようになってきた。

ロ、キリスト教思想史、教会史の研究

一九四九に発見されたクムラン文書(死海の巻物)は、イエスと初代教会の研究上、重大な貢献となっている。

教会史の研究では、法王レオ十三世により、ヴァチカン

の史料保存所が、広く研究者に公開され、カトリック教会としても、新しい大部の教会史を出版している。中世史、中世思想史に関する多くの資料と研究が出版されるようになった。C・H・ドーンは、C・H・Dawson: *Religion and the Rise of Western Culture* (1950)、中

世において、キリスト教会は、如何に、ゲルマンの野蛮王を教化するのに苦心したかをのべ、E・デルソンは、「中世哲学の精神」(一九三六年)で、中世には、ギリシャ哲学に接木された独特なキリスト教哲学が存在したことを受けている。ことに、法王の奨励もあり、トマス研究は盛んとなり、ネオ、トミズム運動となり、ジャック・マリタンなどは、その代表的人物である。宗教改革の研究も進められ、ハルナックの「キリスト教の本質」などは、異った見解も発表されている。

四、宗教哲学及び組織神学の問題

カント哲学の枠の中で、考えられている著書が、まだ多いが、J・Maritan: *Approaches to God* (1962) は、ネオ・トミズムの立場から神の存在を論じ、カントの形而上学批判を批判し、トマスの神存在論の再解釈と彼の

考を付加している。

特に、注目すべきは、実存哲学による宗教問題の理解で、James Brown : Kierkegaard Heidegger, Buber and Barth (1962) は、これらの現代の神学の新しい傾向を、主観と客観との関係からみて、これらの人たちの神学・哲学は、主観性にこそ、真理があるとの考えにたつものだ、という。G・マルセルの実存神学、P・テイリッヒの宗教哲学なども、実存哲学にたっている。

組織神学の方面では、ブルトマスせん風が起ってから、バルト神学は下火になってきたが、バルト神学とブルトマン神学との調和が問題となり、G. Ebeling : Das Wort Gottes und Hermeneutik (1959) は、神の言葉の本質と本質的構造は、神学的解釈学による理解と一致するものであるを示さんとしている。

#### 五、キリスト教倫理学の諸問題

「キリスト教と文化」に関するテーマの研究が多く出されている。G・マルセルや、C・ドゥソン、R・ニーバー、P・テイリッヒなどの研究は注目される。倫理学では、ベルジャエフが、創造的倫理を重視しているのが注

目される。

#### 六、キリスト教教育論

R. C. Millor : Biblical Theology and Christian Education (1956) は、これまでの宗教教育が方法や技術についての研究を主とせると異り、キリストの啓示の事実に日常生活の関係を中心にとしている。

七、実践神学、式文礼拝運動リトルジックが起っている。